

読売新聞 2011 年 3 月 23 日（水）

<医療ルネサンス 5045 緊急連載 震災の現場から 1 >

呼吸器電源 確保に奔走

その時、訪問入浴で浴槽につかっていた体が、波打つ湯と共に大きく揺れ、部屋の照明が消えた。ヘルパーに支えられた体がガタガタ震えた。

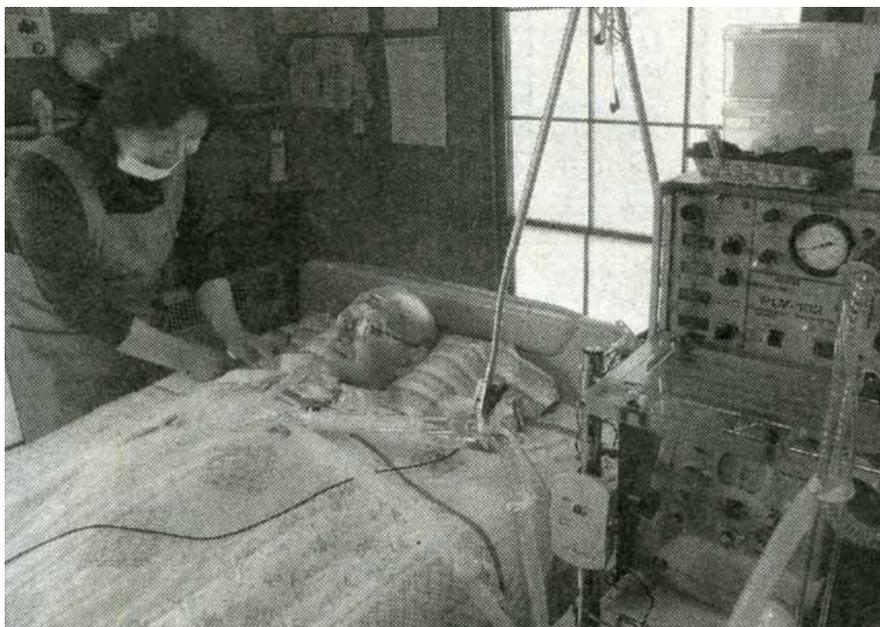
「恐怖で熱も出たよ」

全身の筋力が低下する筋萎縮性側索硬化症（ALS）を患い、仙台市の自宅で生活を送る庄司精悦さん（52）は、体で唯一動かせる額に付けたセンサーで、巨大地震が襲ったときの思いをパソコンでそう書き出した。

停電の瞬間、真っ先に恐れたのは人工呼吸器を動かす電源が途絶えることだった。バッテリー切れを示すアラーム音が、地震から 1 時間もたたずに鳴り始めた。バッテリーは通常、古い型で 1 時間、新しい型で 7、8 時間持つ。庄司さんのバッテリーも数時間は持つはずだったが、劣化していたのか、早くに消耗した。

妹夫婦など家族が、急いで近くの消防署で発電機を借り、近所から燃料のガソリンをかき集めた。しかし、発電機は 2 日後に故障。救急車で東北大病院に緊急入院し、同病院が満床のため翌日、自衛隊のヘリで山形の病院に搬送された。

庄司さんはこうして命をつないだ。電気が復旧した 17 日、自宅に戻れたが、「（緊急時の）電気とガソリンが一番心配だった」と振り返る。



11 日の地震直後、庄司さんら 420 人の患者を往診する仙台往診クリニックの川島孝一郎院長（56）は、電灯が消えた事務所で天を仰いだ。電話がなかなかつながらず、患者が生きているかどうか確認できない。

翌日までに、医師 5 人で手分けして、人工呼吸器を使う重症患者 45 人などの安否を確認した。発電機や車から電源を取り、窮地を脱していた患者もいたが、19 人は緊急入院となった。

燃料不足も深刻だった。停電中、発電機や車のシガーソケットにつないで動かす人工呼吸器は、ガソリンが切れれば止まってしまう。

地震の 2 日後、往診用の車のガソリンもほぼ尽きた。

警察などと交渉し、災害用の緊急車両指定を取って、優先的に給油を受けられるようにした。市内の多くの地域で電気が復旧した 16 日まで、医師の仕事は人工呼吸器を付けた患者へのガソリン配りだった。

川島院長は教訓として、「災害直後は行政の支援が届きにくい。その時、大切なのは自助や共助。緊急時に発電機や燃料を調達できる仕組みや、地域の医療者、介護者同士のネットワーク整備を進めたい」と話す。

未曾有の被害をもたらした東日本巨大地震。被災地の現場で患者や医療者はどう対処し、支え合っているのか。緊急レポートする。